

平成 26 年度 夏休み子ども向け公開講座実施報告

平成 26 年度 夏休み子ども向け公開講座実施報告	1
• はじめに	2
• 平成 26 年度 大学公開講座事業委託実績報告	3
1. 趣旨	3
2. 内容	3
理科 楽しい理科実験	4
図画工作 夏休みの課題（ポスターや風景画）の制作	5
国語 読書感想文を書こう	7
音楽 I みんなで箏を弾いてみよう!	9
音楽 II 手作り楽器作ってあ・そ・ぼ・う	11
英語 英語であそぼ	13

はじめに

千葉敬愛短期大学
学長 明石要一

「夏休み子ども向け公開講座」、本年度で 9 年目を迎えました。この公開講座は、佐倉市の「市民公開講座事業（委託）」の一環で、千葉敬愛短期大学が委嘱をいただいて今日まで実施してきました。企画運営は当大学の「総合子ども学研究所」が行いました。

今年度実施した活動は以下の通りです。

- 理科 対象は 4～6 年生。
トーマス・エジソンが考案した電球を作ってみました。
- 図画工作 対象は 3～6 年生。
ポスターや風景画など、夏休みの課題に挑戦しました。
- 国語 対象は 5～6 年生。
すてきな本を読み、その感想を書くワークショップをしました。
- 音楽 I・II 対象は 3～6 年生。I では「お箏」に触って弾く練習をし、合奏を楽しみました。II では手作りの楽器を作って遊びました。
- 英語 3～6 年生。
英語の歌を歌ったり、ゲームを楽しみながら劇を作り上げました。

多くの子どもたちが参加してくれました。夏休みは子どもにとって、学校では味わえない体験をするチャンスです。本学のスタッフが子どもの目線で活動を展開しました。おかげさまで、参加した子どもたちから感謝とお礼の言葉をいただいています。

体験活動はすぐに成果が出るものではありません。年を重ねるごとに成果が出てきます。体験は即効薬ではなく、漢方薬なのです。

体験にはゴールデン・エイジといわれるものがあります。サッカーの世界では小学校 3, 4, 5 年生頃から始めないとプロでは通用しないそうです。中学校から始めると、そこそこの選手にはなれるが、一流には手が届かないそうです。夏休みはまさに「体験のゴールデン・エイジ」といえそうです。

当大学と佐倉市は 8 月に包括協定を結びました。これを契機に、本学は今後も佐倉市の子どもと市民の皆様のために教育資源を生かしていくつもりです。

終わりになりますが、この貴重な機会を提供してくださいました佐倉市教育委員会並びに関係者の皆様に感謝と敬意を表します。

平成 26 年度 大学公開講座事業委託実績報告

1. 趣旨

大学公開講座委託事業は、佐倉市との委託契約により、高等教育機関の持つ機能を生かした講座を展開し、広く市民に対し生涯学習を通じ、より豊かに生きるための学習支援を行うことを目的に実施した。

2. 内容

千葉敬愛短期大学教授陣の音楽や国語、理科など小学校科目の専門的な知識を活かし、子どもを対象とした体験的な活動の公開講座を実施した。

講座日	講座内容	講師	参加者
平成 26 年 8 月 18 日（月曜日）	理科 楽しい理科実験	林 孝憲 専任講師	27 名
平成 26 年 8 月 19 日（火曜日）	図画工作 夏休みの課題 （ポスターや風景画等）の制作	久保木 健夫 専任講師	27 名
平成 26 年 8 月 20 日（水曜日）	国語 読書感想文を書こう	鈴木 健一 准教授	22 名
平成 26 年 8 月 20 日（水曜日）	音楽 I みんなで箏を弾いてみよう！	鈴木 由美子 非常勤講師	14 名
平成 26 年 8 月 20 日（水曜日）	音楽 II 手作り楽器作ってあ・そ・ぼ・う	谷中 優 教授	8 名
平成 26 年 8 月 21 日（木曜日）	英語 英語であそぼ	米川 聖美 城西国際大学 非常勤講師	21 名

理科 楽しい理科実験

講師：林 孝憲 専任講師

講座日：平成 26 年 8 月 18 日（月曜日）

参加人数：27 名

講座内容について

小学 4～6 年生を対象に身近な材料を用いて、理科実験と制作を行った。実験では、一般的にトーマス・エジソンが考案したと考えられている白熱電球の点灯実験をフィラメントにシャープペンシルを用いて試みた。また、制作は工作用紙とわりばし、輪ゴムを使い、飛行機を制作した。

講座実施についての感想

電球という人類史上最も大きな発明品の一つであり必要不可欠な日用品を改めて教材として取り上げ、その構造を理解しながら実験できたことは、参加者にとって「楽しい」や「不思議」という観点以上の電気の理論に触れることができたのではないかと思う。

実施についてどのような効果があったか

本学と地域との結びつきに貢献できたのではないかと考えている。

その他

実験と制作に時間がかかってしまい、制作した飛行機を飛ばす時間がなかったのが残念であった。



図画工作 夏休みの課題（ポスターや風景画）の制作

講師：久保木 健夫 専任講師

講座日：平成 26 年 8 月 19 日（火曜日）

参加人数：27 名

講座内容について

佐倉市内の各小学校で出題される夏休みの課題（図画工作のポスター製作）を本講座で実施した。例年、参加児童が事前にテーマを決め、必要な描画材料や資料を持参し、可能であればデッサンを描いてくることとしている。本講座では、参加児童のイメージや構図等を確認し、作品の発想や構想段階を共に考え、製作する形をとっている。講座の時間内での作品の完成を心掛けているが、作品が完成できない場合には各自が自宅に持ち帰って仕上げることになる。

夏休みの宿題は、おそらくどの家庭の児童や保護者にとっても、つい先延ばしにしてしまう傾向のあるものかもしれないが、本講座のような環境下で集中して取り組んでしまうことは、児童にとっても、保護者にとっても意義のあることだと思われる。

昨年度に引き続き、今年度も本講座に本学の学生がアシスタントとして 2 名参加した。また、本講座の最後には、簡単な作品鑑賞会を実施し、保護者やスタッフも交えて児童の作品を愉しんだ。

講座実施についての感想

参加した児童は、自分のイメージや想いをしっかり持ち、試行錯誤しながらも、集中して作品製作に取り組んでいた。中には、自由研究や総合的なテーマをもとにしたような作品を製作する児童も見受けられたが、表現しようとする世界を自分でしっかりと把握し、工夫しながら表現することができていた。参加した本学の学生は、2 名とも保育志望の学生であったが、小学生と直接関わる貴重な機会となった。子どもの姿や反応等は、こうした場に実際に立ち会ってみなければわからないことが多い。学生に対する児童や保護者からの反応も、概ね好意的だったと感じている。

実施についてどのような効果があったか

地域の児童や保護者と造形活動を通して交流することができた。筆者や学生にとっても貴重な学びの機会となった。本講座のように、造形活動の場合でも、様々な人々が共に学びあい、交流できる機会や場を充実させていくことが大切だと感じている。

その他

今後も、本学や図画工作に愛着や親近感を感じて頂けると幸いである。



国語 読書感想文を書こう

講師：鈴木 健一 准教授

講座日：平成 26 年 8 月 20 日（水曜日）

参加人数：22 名

講座内容について

初めに学年毎に着席させ、読んだことのない本を持参した者同士がペアになるよう調整した。相手の持参した本について知りたいことを三つ書いて渡すようにさせた。（相手の知りたいことは、感想文の材料の一つになると説明した。）その後、次のように指導した。

〔前半〕講義形式の全体指導

- ア 「感想」とはどのようなものか。「感」とは。「想」とは。
- イ 感想を書くに当たっての心構え
- ウ 感想文における大事な要素
- エ 書くうえで大切なこと

〔後半〕個別指導

台紙を配付し、まず、枠内に書名と選んだ理由を記入させた。個別に点検し、不足なく書けている子どもには文種に合わせた質問用紙を配って記入させた。点検して次の用紙を、という作業を繰り返し、できたものを台紙に貼らせていって構想プランにした。

講座実施についての感想

書きたい本が違えば、当然感想も違ってくる。一人一人違ったものができてくるので、個別に関わっていくことが重要になる。そのため、人数は 20 名程度が限度である。

どう書けばよいかの前にどんなことを書くのかが分かってなくてはならない。項目を示し、一人一人と向き合って確認する作業が大事になる。文章を書くところまで時間内に届かなかったが、あとは自分でできるというところまで行くことができたと思う。

実施についてどのような効果があったか

「感想」や「感想文」についての認識を改めたり深めたりすることができたと思う。読書感想文に欠かせない要素、読書感想文を書く上での手順や留意点にも気づかせることができた。今回の学習を経験して、こうすれば書けるんだという手応えを一人一人がつかんだのではないかと考えられる。

その他

中学年と高学年では「書くこと」の目指すところが違っている。より効果的な運営をするためには、対象を高学年に限定すべきかと思われる。



音楽 I みんなで箏を弾いてみよう!

講師：鈴木 由美子 非常勤講師

講座日：平成 26 年 8 月 20 日（水曜日）

参加人数：14 名（+希望保護者 3 名）

講座内容について

この講座の目的は、普段触れることの少ない和楽器の代表である箏について、その歴史や流派などについて学び、全員で一曲を演奏したり合奏を経験することにある。そこには、演奏に伴う基本的な作法や所作などを伝えることも含んでいる。

今回は、14 名の参加者（申し込み 15 名当日欠席 1 名）の中で、3 年生が 5 名、4 年生が 4 名、5 年生が 2 名、6 年生が 3 名であった。男子児童の参加は 2 名であった。準備した楽器数に余裕があったため、会場まで付き添って来場した保護者全員に声をかけ、そのうち 3 名の参加があった。進行としては、講座の内容説明と全員による自己紹介を行った後、箏についての基礎知識や歴史をレジュメにまとめたものを参考にしながら進めたが、主に伝えたことは、「生田流と山田流の大まかな違い」「そうと箏と琴の違い」であった。

講座開始 40 分位を過ぎたところで、実際に箏に触れ演奏することに入った。初めは、爪を自分の爪と同じ方向に着けてしまったり、飛ばしてしまったりと様々な様子が見られたが、時間とともに慣れることができ、音もしっかりとした。何よりも、音を出し始めた途端に、表情が一変し楽しんでいることが伝わってきた。

途中、何回か休憩をはさみながら、「演奏姿勢」「親指の練習」「全ての絃の音を出すこと」「箏特有の弾き方を経験すること」「箏の譜面を見て演奏すること」を経験した。初めての楽器経験、練習という名の反復作業に、疲れと飽きの見えることがあったので、各自の判断で手を休ませることも構わないとした。

時間の最後には、25 分の「ミニ・コンサート」を行い、「さくらさくら」の少人数合奏、全体合奏、参加保護者の演奏を行った。

講座を実施についての感想

小学校での邦楽体験が根付いてきたのか、この講座で出会う子ども達の邦楽経験が増えていることは、とても嬉しいことであった。

初めは、お互いに警戒しあって言葉も交わずにいた子ども達だったが、時間とともに気持ち解れていくのが表情や演奏となって現れ、音楽の持つ力と子ども達の吸収力の強さを感じた。

この講座を 4 年生の時から受講し 6 年生となった児童から、「来年から参加できなくて残念です。」と感想をもらった。

実施についてどのような効果があったか

短い時間ではあったが、誤解の多い「琴」と「箏」について、正確な知識を伝えられたこと。また個人練習の後、全員で一曲を演奏し、音を合わせるために何が必要か学び、それを知っていることが自分たちに何をもたらすか経験することができたと思う。また、すぐできることもあるが、繰り返して練習し「仕上げていく」こと、その喜びを経験してもらえたのではないかなと思う。

その他

この講座は、楽器の搬入、セッティング、調弦、手伝ってくれる学生への事前レクチャーを何日かに分けて行っている。

箏は、学生にとっても初めての楽器であることが多いのだが、戸惑いながらもよく頑張ってくれたと思う。

ただ、学生の意識という点でなかなか難しいものを感じる事があり、今後の課題としたいと思う。



音楽 II 手作り楽器作ってあ・そ・ぼ・う

講師：谷中 優 教授

講座日：平成 26 年 8 月 20 日（水曜日）

参加人数：8 名

講座内容について

身近な材料を使って簡単な「手作り楽器」（音具=おんぐ）を作り、それらを使って音あそびしたりして音を楽しむ。

作成した「手作り楽器」

1. ミニムチ・パッチン（紙の菓子箱を解体して 20 センチ程度の帯状のものを二枚張り合わせ両端をつまんで勢いよく外側に引っ張って音を出す）
2. ミラクル・ホース（蛇腹ホースを使った簡単に出来る手作り楽器）
3. ペーパー・ホイッスル（10 枚ほどの用紙を重ねて作る）
4. クイーカ（空き缶と竹ひごで作るアフリカの民族楽器。空き缶版と紙コップバージョンの二種類を作成）
5. 空き缶カリンバ（空き缶 1-2 個で作る簡易型指ピアノ）
6. レイン・スティック（料理用ラップの芯と爪楊枝で作るアフリカの民族楽器。その名のとおり雨や波の音がする癒し系の楽器）

講座実施についての感想

参加人数が少ない分、一人ひとりに十分に目を向けることができ、その分、個々の手作り楽器はクオリティの高いものになった。補助の学生も事前指導で作り方を十分理解していて、的確な補助活動に終始して講座がスムーズに進行した。また当初の予定よりも多くの楽器に取り組むことができた。

実施についてどのような効果があったか

1. 参加児童全員が全て失敗無く楽器を作成し、その全てがしっかりと音を出すことが出来た。
2. 作成した楽器について、音を出すことや良い音の出し方など、全員に試行錯誤の中での工夫が見られた。
3. 音を楽しむ体験から新しい音の発見があった。

その他

缶の内側のギザギザは危険なため、必ず処理しておいてほしい旨、保護者に連絡していたが、そのままのものが多かった。クイーカの作成に時間が取られ最後のミニ演奏会が出来なかったことは残念。



英語 英語であそぼ

講師：米川 聖美 城西国際大学 非常勤講師

講座日：平成 26 年 8 月 21 日（水曜日）

参加人数：21 名

講座内容について

平成 26 年度より英語が小学校の授業に組み込まれ、ますます英語教育への関心が深まっています。

小学校における「英語活動」は、その語句が示すように、知識として英語を学ぶというよりも、英語を用いた「活動」という体験を通してコミュニケーション能力を身につけることが求められます。そして、コミュニケーションを通して他者への理解を深め、広い世界を知ることとなり、視野が深まっていきます。このように、異なる文化を持った人々とも、ともに生きる資質や能力が育成されることに、小学校の英語教育の意義があるのです。

今回もこのような主旨を踏まえ、初めて出会い、しかも学年も違うさまざまな児童たちが、自己紹介ゲーム等多岐に渡るゲームや英語の歌を楽しみながら、そして最後にはみんなが苦勞しながら、英語劇「七匹の子やぎ」を創り上げることを通して、達成感を味わいます。

講座実施についての感想

今回は本学 1 年生二人にアシスタントとして参加していただきました。英語が小学校に導入されて以来、小学校の先生方から「教え方がわからない」との御相談が多く寄せられるため、児童への指導だけでなく、小学校教員を目指す学生さんたちにとっても良い学びの場であればとの思いからでした。

授業に先立ち打ち合わせを行いました。「小学校における外国語活動」について説明をした上で、文字を使わずにみんなが楽しく実行できることに留意すること。また、例年みんなの輪に素直に入って行くことが難しい児童もいたりするが、それもひとつの個性だから、温かい言葉かけをしてお互いに寄り添えるよう見守ってほしい、と伝えました。

当日、そのような事例も散見されましたが、アシスタントの学生さんたちの大活躍で、最後にはみんなが一つの劇を創り上げることができ、一同達成感を得ることができました。

実施についてどのような効果があったか

猛暑の中、14の小学校の3年生から6年生まで21名が参加してくれました。自分の意志ではなく親から参加するよう言われて来た児童も多く、最初は緊張してよそよそしい態度のお子もいましたが、ゲームや歌が進むにつれて楽しそうに発話し、たくさんの友達ができたと報告をしてくれました。

最後の締めでは、講座の始めに勉強した英語の歌をアシスタントの学生さんたちだけで指導してもらいました。とても自然に上手く出来ており、児童たちはノリノリでとても楽しそうでした。児童と教育者を志す学生さんの相互にプラスの効果があったと、嬉しく思っています。

また、数年前にはお母さんのそばで兄姉たちの活動を参観していた少女たちが、今回は自分が参加できると楽しみに来てくれたことを知り、胸の熱くなる思いがしました。私にとっても「英語活動」の役割を再認識した時間でもありました。

その他

猛暑のなか、エアコンが故障してしまうという大変な事態に、慌てることなく大型扇風機を設置するなど迅速な対応をしてくださった事務局の方々に感謝いたします。大変お世話さまになり誠にありがとうございました。

